

医療短期大学生における母性意識の特徴

—看護学生と未婚女性との比較—

榮 玲子*, 野口純子, 宮本政子

香川県立医療短期大学看護学科

A Feature of Motherhood Readiness by Students in College of Medical Health

Reiko Sakae*, Junko Noguchi and Masako Miyamoto

Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Key Words : 母性意識 (motherhood), 母性理念 (maternal attitude), 対児感情 (feeling to child), 看護学生 (nursing student)

はじめに

わが国では核家族化と少子化が進み, 家族や地域社会との関連性が希薄化してきている。このような環境においては幼少期からの生育歴が変化し, 母親行動の観察や乳児との触れ合いの機会なども少なく, 青年期の看護学生における母性意識の発達にも影響していることが考えられる。また, 看護学生を対象とした母性意識の発達に関する研究¹⁾では母性看護学の習得が母性意識の発達に役立っていると報告

されている。つまり, 母性看護学では母性という対象への看護を学ぶだけでなく, 青年期にある学生自身の母性を深くみつめ, 母性として成長・成熟するために学ぶという側面が存在するのである。特に母性看護学実習では出生直後の母子と直接触れ合う体験をもつことができ, 母性を実感する刺激となることが多い。したがって, 母性看護学習得前の学生の母性意識を知ることは学生の成長を助ける教育方法やその後の母性意識の発達変容への影響を検討する上で重要な意味をもつと考える。

*連絡先: 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護学科

*Corresponding address: Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

そこで、本調査は母性看護学実習前の学生の特性と母性理念および対児感情の質問紙を用いて行い、結果を分析することにより本学看護学科学生のもつ母性意識の特徴を明らかにすることを目的とした。

対象と方法

本県立医療短期大学の看護学科1年生女子49名を対象に1999年11月に質問紙調査を行った。調査項目は学生の背景（年齢、家族構成、両親の職業、兄弟数、出生順位、乳児接触経験）と花沢²⁾の母性理念質問紙および対児感情評定尺度を使用し、自己記入法により調査した。

母性理念質問紙は27項目からなる自記式質問紙であり、伝統的な母親役割を肯定する内容の項目（以下、肯定項目と略す）が18項目、伝統的な母親役割を否定するような内容の項目（以下、否定項目と略す）の9項目で構成されている。「非常にそう思う」を5点とし、「非常にちがう」を1点とした5段階で得点化した。さらに肯定項目得点（以下、肯定得点と略す）と否定項目得点（以下、否定得点と略す）を求めた。

対児感情評定尺度は児の肯定・受容をあらわす接近感情項目（以下、接近項目と略す）と児の否定・拒否をあらわす回避感情項目（以下、回避項目と略す）からなり、接近項目14語、回避項目14語の計28語の形容詞で構成されている。「非常にそのとおり」を4点とし「そんなことはない」を1点とした4段階で得点化した。さらに接近項目得点（以下、接近得点と略す）と回避項目得点（以下、回避得点と略す）を求め、接近感情と回避感情との相克度を示す拮抗指数を回避得点÷（接近得点+回避得点）×100で算出した。拮抗指数は接近得点と回避得点とが同点になったときは50となり、50以上になるほど回避得点のほうが高いことを表している。

なお本研究に用いる用語は花沢^{3,4)}が定義づける母性意識および母性感情の概念に基づき次のように定義した。

母性意識：女性が母親になる、あるいは母親であることの自覚を母親自覚と呼び、この母親自覚と母性理念とを包括したものとした。

母性理念：女性が母親になる、あるいは母親であることの自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度や価値観をいう。

対児感情：児に対する感情をいう。

調査項目の分析は母性理念および対児感情におけ

表1 対象の背景

| | | |
|----------|------|-----------|
| 年齢（歳） | | 18.7±0.6 |
| 出生順位 | | 1.7±0.7 |
| 兄弟姉妹数 | | 2.5±0.7 |
| 家族数 | | 5.0±1.2 |
| 平均値±標準偏差 | | |
| 核家族の割合 | | 28 (57.1) |
| 乳児接触経験 | あり | 47 (95.9) |
| | なし | 2 (4.1) |
| 父の職業 | 勤務者 | 36 (73.5) |
| | 自営業 | 8 (16.3) |
| | 農林漁業 | 2 (4.1) |
| 母の職業 | 勤務者 | 13 (26.6) |
| | パート | 17 (34.7) |
| | 主婦 | 12 (24.5) |
| | | 人 (%) |

る各項目の平均得点と標準偏差を算出し、伊藤⁵⁾の調査した看護学科学生48名のデータとの比較をt検定を用いて行った。加えて母性理念の各項目回答割合および対児感情における拮抗指数の平均得点と標準偏差を算出し、花沢⁶⁾の調査した20歳代未婚女性のデータとの比較を χ^2 検定を用いて行った。さらに兄弟のうち弟妹の有無と対児感情の拮抗指数の比較をt検定を用いて行った。

なお、有意差検定はパソコン用統計分析ソフト「SPSS」およびエクセル統計を用いて χ^2 検定、t検定を行った。

結果

1. 対象の特性

対象の背景は表1の示すとおりである。平均年齢18.7±0.6歳、平均出生順位1.7±0.7位、平均兄弟姉妹数2.5±0.7人、平均家族数5.0±1.2人で、核家族の割合は57.1%（28人）であった。また兄弟姉妹のいる学生は93.9%（46人）で、そのうち52.2%（24人）に弟妹がいた。乳児接触経験のある学生は95.9%（47人）あり、ほとんどの学生が乳児の「抱っこ」「オムツ交換」「あやす」「授乳」などの経験をしていた。父母の職業では父親は勤務者が73.5%（36人）、母親はパート（17人）を含めた勤務者が61.3%（30人）と多く、専業主婦は24.5%（12人）であった。

授業進度状況は母性看護学と小児看護学の講義のうち母性看護学概論、小児看護学概論のみ6時間終了しており、母性・小児看護学実習は開始されてい

表2 母性理念各項目の得点

| | 項目内容 | 本学看護学科学生 | 他学看護学科学生 |
|------------------------------|---------------------------------|--------------|--------------|
| 肯定項目 | 1. 妊娠は女にとって、すばらしい出来事である | 4.51±0.68 | ** 4.08±0.74 |
| | 2. 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である | 4.37±0.97 | 4.15±0.87 |
| | 4. 赤ちゃんを産んではじめて子どものかわいさがわかる | 3.29±1.02 | 2.94±1.10 |
| | 5. 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみも我慢できる | 3.78±0.87 | 3.55±1.02 |
| | 7. 女は子どもを産むことで自分が生きた証拠を残すことができる | 2.92±1.04 | 3.19±1.08 |
| | 8. どんなことをしても赤ちゃんは母乳で育てるべきである | 3.27±0.86 | 3.63±1.00 |
| | 10. 子どもを産んで育てるのは社会に対する女の務めである | 2.57±0.89 | 2.90±1.02 |
| | 11. 女は子どもを持つことで人生の価値を知ることができる | 3.23±0.94 | * 2.83±0.93 |
| | 13. 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である | 2.73±0.91 | 3.00±0.97 |
| | 14. 子どもを産んで育てることは自分自身の成長につながる | 4.53±0.74 | ** 3.98±0.81 |
| | 16. 子どもを産んで育てなければ女に生まれた甲斐がない | 2.39±0.98 | 2.85±1.11 |
| | 17. 子どもがいることで家庭生活はより楽しくなる | 4.53±0.65 | ** 4.06±0.78 |
| | 19. わが子の成長を見とどけるために長生きしなければならない | 4.27±0.78 | ** 3.75±0.76 |
| | 20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である | 4.20±0.84 | ** 3.60±0.98 |
| | 22. わが子のためなら自分を犠牲にすることができる | 4.08±0.76 | 3.75±0.81 |
| | 23. 子どもを育てるのは生みの母が最良である | 4.06±0.88 | 3.88±1.10 |
| 25. わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りがでる | 4.16±0.66 | ** 3.71±0.71 | |
| 26. 育児に専念したいというのが女の本音である | 3.02±0.90 | 2.83±0.93 | |
| 否定項目 | 3. 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである | 1.57±0.71 | 1.96±0.90 |
| | 6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である | 3.02±1.09 | 2.81±1.02 |
| | 9. 予定していない妊娠の場合は人工中絶もやむを得ない | 3.08±0.89 | 2.96±1.05 |
| | 12. 結婚生活を楽しむためには子どもを作らないほうがよい | 2.02±0.85 | 2.25±0.79 |
| | 15. わが子を他人にあずけても自分の仕事を続けるべきである | 2.41±0.79 | 2.38±0.76 |
| | 18. 育児は妻だけでなく夫も分担すべき仕事である | 4.78±0.51 | ** 4.21±0.71 |
| | 21. 育児に追われていると若さが早く失われる | 3.20±0.98 | 3.27±0.84 |
| | 24. 育児から解放される時に人間らしい自由な生活ができる | 2.61±0.86 | 2.69±0.83 |
| | 27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている | 2.51±0.92 | 2.94±0.78 |

(平均値±標準偏差) *p<0.05 **p<0.01

ない時期である。

2. 母性理念の得点と平均値

母性理念の各項目および肯定得点・否定得点の得点平均値と標準偏差について本学看護学科学生（以下、本学学生と略す）と伊藤の調査した看護学科学生（以下、他学学生と略す）とを比較検討した。

1) 各項目得点の平均値

本学学生の肯定項目の平均得点は他学学生と比較すると高い傾向にあった。「1. 妊娠は女にとって、すばらしい出来事である」「11. 女は子どもをもつことで人生の価値を知ることができる」「14. 子どもを産んで育てることは自分自身の成長につながる」「17. 子どもがいることで家庭生活はより楽しくなる」「19. わが子の成長を見とどけるために長生きしなければならない」「20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である」「25. わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りがでる」の7項目において、本学学生が有意に高い得点を示した。

否定項目は「6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である」「9. 予定していない妊娠の場合は人工中絶もやむを得ない」「15. わが子を他人にあずけても自分の仕事を続けるべき

表3 母性理念の肯定得点と否定得点の比較

| 得点区分 | 本学看護学科学生 | 他学看護学科学生 |
|------|--------------|------------|
| 肯定得点 | 65.90±6.74** | 62.60±9.54 |
| 否定得点 | 25.20±3.68 | 25.46±3.53 |

(平均値±標準偏差) **p<0.01

である」「18. 育児は妻だけでなく夫も分担すべき仕事である」の4項目の平均得点が高かった。他学生と比較すると、「18. 育児は妻だけでなく夫も分担すべき仕事である」の1項目のみが有意に高かった（表2）。

2) 肯定得点と否定得点の比較

本学学生の肯定得点の平均値は65.90で、他学生62.60に比べて有意に高く、否定得点においては差がみられなかった（表3）。

3. 対児感情の得点と平均値

対児感情の各項目および接近得点・回避得点の平均値を本学学生と他学学生について比較検討した。

1) 各項目得点の平均値

接近項目は「みずみずしい」以外の13項目において平均得点が高く、「あたたかい」「あかるい」「たのしい」「うつくしい」の4項目が有意に高い得点を示していた。回避項目では、「は

表4 対児感情各項目の得点

| | 項目内容 | 本学看護学科学生 | 他学看護学科学生 |
|------|--------|-------------|-----------|
| 接近項目 | あたたかい | 3.57±0.61* | 3.19±0.67 |
| | うれしい | 3.20±0.91 | 2.98±0.81 |
| | すがすがしい | 2.35±0.97 | 2.15±0.82 |
| | いじらしい | 2.76±1.03 | 2.44±0.94 |
| | しろい | 2.59±1.10 | 2.21±0.97 |
| | ほほえましい | 3.73±0.49 | 3.67±0.52 |
| | ういういしい | 3.53±0.68 | 3.40±0.76 |
| | あかるい | 3.33±0.77* | 2.90±0.93 |
| | あまい | 2.63±1.01 | 2.56±1.05 |
| | たのしい | 3.47±0.71** | 3.04±0.87 |
| | みずみずしい | 2.91±1.04 | 3.04±0.87 |
| 回避項目 | やさしい | 2.90±0.96 | 2.63±1.00 |
| | うつくしい | 2.57±1.02** | 2.08±0.74 |
| | すばらしい | 3.06±0.92 | 2.83±0.95 |
| | よわよわしい | 2.53±0.96 | 2.58±1.05 |
| | はずかしい | 1.41±0.67 | 1.27±0.57 |
| | くるしい | 1.12±0.33 | 1.29±0.54 |
| | やかましい | 2.00±0.89 | 2.17±0.93 |
| | あつかましい | 1.12±0.33 | 1.29±0.68 |
| | むずかしい | 2.39±0.98 | 2.35±1.18 |
| | てれくさい | 1.86±0.91 | 1.63±0.79 |
| | なれなれしい | 1.39±0.76 | 1.48±0.87 |
| 目 | めんどくさい | 1.51±0.62 | 1.65±0.73 |
| | こわい | 1.61±0.89 | 1.75±0.91 |
| | わずらわしい | 1.27±0.57 | 1.54±0.82 |
| | うっとうしい | 1.22±0.47 | 1.46±0.87 |
| | じれったい | 1.86±0.84 | 1.69±0.85 |
| | うらめしい | 1.35±0.63 | 1.46±0.82 |

(平均値±標準偏差) *p<0.05 **p<0.01

表5 対児感情の接近得点と回避得点の比較

| 得点区分 | 本学看護学科学生 | 他学看護学科学生 |
|------|--------------|------------|
| 接近得点 | 41.80±9.40** | 39.11±6.51 |
| 回避得点 | 22.12±5.95** | 23.61±5.90 |

(平均値±標準偏差) **p<0.01

ずかしい」「むずかしい」「てれくさい」「じれったい」の4項目において本学学生の平均得点が高かったが、有意差はみられなかった(表4)。

2) 接近得点と回避得点の比較

接近得点は本学学生41.80, 他学生39.11であり、本学学生が有意に高かった。また回避得点は本学学生22.12, 他学生23.61であり、他学学生に比べて有意に低い得点を示した(表5)。

4. 母性理念の各項目回答割合の比較

母性理念の各項目回答割合について本学学生と花沢の調査した20歳代における未婚女性(以下、未婚群と略す)とを比較検討した。

母性理念・肯定各項目回答の本学学生-未婚群間

比較においては「1. 妊娠は女にとって、素晴らしい出来事である」「2. 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である」「13. 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である」「14. 子どもを産んで育てることは自分自身の成長につながる」「17. 子どもがいることで家庭生活はより楽くなる」「19. わが子の成長を見とどけるために長生きしなければならない」「20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である」「22. わが子のためなら自分を犠牲にすることができる」「25. わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りがある」「26. 育児に専念したいというのが女の本音である」の10項目において有意差があった(表6)。

特に本学学生は「1. 妊娠は女にとって、素晴らしい出来事である」「2. 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である」「14. 子どもを産んで育てることは自分自身の成長につながる」の3項目において60%以上の学生が「非常にそう思う」と肯定回答していた。逆に「13. 育児は女に向いている仕事であるからするのが自然である」「26. 育児に専念したいというのが女の本音である」の2項目においては「どちらとも思わない」あるいは「違う」という否定的な回答割合が多い傾向にあった。

母性理念・否定各項目回答の本学学生-未婚群間比較においては「3. 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである」「18. 育児は妻だけでなく夫も分担すべき仕事である」「24. 育児から解放される時に人間らしい自由な生活ができる」「27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている」の4項目で有意差がみられた。

「18. 育児は妻だけでなく夫も分担すべき仕事である」の項目は本学学生に「非常にそう思う」という肯定回答割合が多く、逆に「3. 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである」では「非常に違う」という否定回答割合が多かった。また「24. 育児から解放される時に人間らしい自由な生活ができる」では未婚群に比べ本学学生の「違う」という否定項目割合が少なかった(表7)。

5. 対児感情における拮抗指数

拮抗指数は本学学生の平均値が22.50(±11.44)であり、指数50以上のものが1人、40以上が3人であった。前述の20歳代未婚群での平均が38.3(±20.15)、16~18歳の平均が37.2(±21.43)であり、これら対象と比較しても本学学生の平均拮抗指数は低かった。

また弟妹の有無と拮抗指数の関係では弟妹のいる

表6 母性理念・肯定各項目回答の本学学生—未婚群間比較 (%)

| 肯定項目 | 群 | 絶対にそう思う | そう思う | どちらとも | 違う | 非常に違う |
|---------------------------------|------------|--------------|--------------|--------------|--------------|----------------|
| 1. 妊娠は女にとって、すばらしい出来事である | 本学学生 未婚 | 61.2 26.0 | 28.6 41.4 | 10.2 28.8 | 0.0 3.8 | 0.0 0.0 ** |
| 2. 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である | 本学学生 未婚 | 61.2 34.5 | 22.4 36.8 | 10.2 19.4 | 4.1 7.6 | 2.0 1.7 ** |
| 4. 赤ちゃんを産んではじめて子どものかわいさがわかる | 本学学生 未婚 | 14.3 16.7 | 26.5 32.3 | 32.7 21.1 | 26.5 22.6 | 0.0 7.4 |
| 5. 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみも我慢できる | 本学学生 未婚 | 20.4 15.2 | 44.9 36.4 | 26.5 33.6 | 8.2 10.6 | 0.0 4.2 |
| 7. 女は子どもを産むことで自分が生きた証拠を残すことができる | 本学学生 未婚 | 6.1 8.0 | 20.4 24.9 | 42.9 29.8 | 20.4 26.6 | 10.2 10.8 |
| 8. どんなことをしても赤ちゃんは母乳で育てるべきである | 本学学生 未婚 | 10.2 10.6 | 32.4 32.8 | 51.0 41.9 | 16.3 12.1 | 0.0 2.5 |
| 10. 子どもを産んで育てるのは社会に対する女の務めである | 本学学生 未婚 | 0.0 5.1 | 14.3 23.7 | 40.8 36.8 | 32.7 27.5 | 12.2 6.8 |
| 11. 女は子どもを持つことで人生の価値を知ることができる | 本学学生 未婚 | 6.1 3.0 | 32.7 25.8 | 44.9 36.4 | 10.2 24.3 | 6.1 10.3 |
| 13. 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である | 本学学生 未婚 | 0.0 5.1 | 20.4 40.0 | 42.9 31.1 | 26.5 15.8 | 10.2 8.0 * |
| 14. 子どもを産んで育てることは自分自身の成長につながる | 本学学生 未婚 | 63.3 28.7 | 30.6 56.6 | 2.0 11.6 | 4.1 3.0 | 0.0 0.2 ** |
| 16. 子どもを産んで育てなければ女に生まれた甲斐がない | 本学学生 未婚 | 2.0 2.9 | 30.6 19.5 | 2.0 25.8 | 4.1 36.1 | 0.0 15.8 |
| 17. 子どもがいることで家庭生活はより楽くなる | 本学学生 未婚 | 59.2 25.6 | 36.7 52.0 | 2.0 18.4 | 2.0 2.1 | 0.0 1.9 ** |
| 19. わが子の成長を見とどけるために長生きしなければならない | 本学学生 未婚 | 44.9 13.3 | 38.8 33.8 | 14.3 35.5 | 2.0 14.6 | 0.0 2.9 ** |
| 20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である | 本学学生 未婚 | 40.8 10.6 | 42.9 41.8 | 14.3 24.9 | 0.0 15.6 | 2.0 7.2 ** |
| 22. わが子のためなら自分を犠牲にすることができる | 本学学生 未婚 | 30.6 7.6 | 49.0 42.7 | 18.4 37.2 | 2.0 8.9 | 0.0 3.6 ** |
| 23. 子どもを育てるのは生みの母が最良である | 本学学生 未婚 | 38.8 28.3 | 30.6 34.4 | 28.6 26.2 | 2.0 8.0 | 0.0 3.2 |
| 25. わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りがある | 本学学生 未婚 | 30.6 6.5 | 55.1 48.4 | 14.3 36.2 | 0.0 7.2 | 0.0 1.7 ** |
| 26. 育児に専念したいというのが女の本音である | 本学学生 未婚 | 10.2 3.6 | 6.1 12.0 | 63.3 41.4 | 16.3 32.1 | 4.1 11.0 ** |

*P<0.05 **P<0.01

表7 母性理念・否定各項目回答の本学学生—未婚群間比較 (%)

| 否定項目 | 群 | 絶対にそう思う | そう思う | どちらとも | 違う | 非常に違う |
|--------------------------------|------------|--------------|--------------|--------------|--------------|-----------------|
| 3. 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである | 本学学生 未婚 | 0.0 2.1 | 0.0 8.7 | 12.2 24.1 | 32.7 40.8 | 55.1 24.3 ** |
| 6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である | 本学学生 未婚 | 8.2 7.8 | 24.5 23.0 | 38.8 28.8 | 18.4 31.5 | 10.2 8.9 |
| 9. 予定していない妊娠の場合は人工中絶もやむを得ない | 本学学生 未婚 | 4.1 8.2 | 24.5 29.2 | 53.1 34.9 | 12.2 17.8 | 6.1 9.9 |
| 12. 結婚生活を楽しむためには子どもを作らないほうがよい | 本学学生 未婚 | 0.0 1.0 | 0.0 2.3 | 36.7 27.5 | 28.6 43.1 | 34.7 25.8 |
| 15. わが子を他人にあずけても自分の仕事を続けるべきである | 本学学生 未婚 | 0.0 1.0 | 2.0 4.4 | 53.1 40.6 | 28.6 35.3 | 16.3 18.6 |
| 18. 育児は妻だけでなく夫も分担すべき仕事である | 本学学生 未婚 | 81.6 36.2 | 14.3 50.1 | 4.1 9.9 | 0.0 2.9 | 0.0 1.0 ** |
| 21. 育児に追われていると若さが早く失われる | 本学学生 未婚 | 8.2 4.7 | 30.6 21.8 | 38.8 29.2 | 18.4 36.1 | 4.1 8.2 |
| 24. 育児から解放される時に人間らしい自由な生活ができる | 本学学生 未婚 | 0.0 0.8 | 12.2 6.5 | 49.0 26.8 | 26.5 52.8 | 12.2 13.3 ** |
| 27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている | 本学学生 未婚 | 2.0 10.8 | 8.2 23.5 | 42.9 35.9 | 32.7 24.3 | 14.3 5.5 ** |

*P<0.05 **P<0.01

学生の平均拮抗指数が23.39 (±12.67), 弟妹のいない学生の平均拮抗指数が21.64 (±10.30) であり, 弟妹のいる学生において有意 (P<0.05) に拮抗指数が高かった。それは弟妹の有無で平均回避得点は変わらないが, 弟妹のいない学生において平均接近得点が高いためである。

考察

妊娠・出産・育児を経験する以前の母性意識の発達は乳幼児期における基本的信頼の形成や思いやりの形成, 幼少期や思春期における母性行動の観察や体験など, 母親との関わりや個人的観察・経験の積み重ねで形成・発達変容するといわれている⁷⁾。また, 子どもとの接触が母親となることへの肯定的な意識を育てるのに役立つ⁸⁾ともいわれており, 青年期における女性の発達段階において子どもに関心を持ち自分自身の母性性に気づくことは重要である。本学学生は他学生や未婚群との比較において, 母性理念の肯定得点が高く, 対児感情の接近得点も高いという結果であり, 「子どもに対して持つ特定の感情⁹⁾」といわれる母性意識が比較的発達していると推察できる。

母性理念の各項目では「1. 妊娠は女にとってすばらしい出来事である」「2. 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である」「14. 子どもを産んで育てることは自分自身の成長につながる」の3項目に肯定回答が多い。また他学生や未婚群の比較においても有意差が認められたことより, ほとんどの学生が母親になる, あるいは母親であることや妊娠・分娩・育児に対する考えを肯定的に受け止めているといえる。

これまでの調査報告によると乳幼児との接触経験は母性発達の重要な要因とされている。斎藤ら¹⁰⁾の調査では幼児と遊んだり, 世話を経験したことのあつた未婚女性は母性意識が高い傾向を示したと報告している。

本学学生は平均家族数が5人, 約9割の学生に平均2.5人の兄弟姉妹がおり, 兄弟のいない学生は6.1%と非常に少なく約半数が拡大家族である。1997年版厚生白書¹¹⁾によると平均出生児数は2.21で, 三世帯世帯など拡大家族の全体に占める割合は10.5%, 青年期において乳児を一度も抱いたことのない者は30%という結果であった。こうした社会環境における少子化や核家族化に反して本学学生は多くの家族, 兄弟姉妹の中で育ち, 約96%が乳児との

接触経験をもっている。したがって本学学生が他学学生や未婚群との比較において母性理念の肯定得点や肯定割合が高いことは, 家族背景や乳児接触経験が影響していると考えられる。

しかし各項目をみると「13. 育児は女に向いている仕事であるからするのが自然である」や「26. 育児に専念したいというのが女の本音である」の肯定項目が否定的で, 否定項目の「18. 育児は妻だけでなく夫も分担すべき仕事である」が有意に高い。さらに未婚群との比較においても「24. 育児から解放される時に人間らしい自由な生活ができる」の否定項目割合が多い。これらのことから乳児接触経験はあるが実際の育児は大変であり, 育児そのものを肯定的には受けとめておらず, 母親役割行動につながっていないのではないかと推察された。

また母親が何らかの仕事を持ち, 勤務している母親を持つ学生が約60%と多いことから育児は女性のみが担う役割ではないと考え, また職業と家庭を両立させている母親の姿を通して自立した女性に育つだけでなく, 母親・父親の役割や女性であることについて考える機会に接し, 自己の考えが培われていると推察された。

対児感情では接近得点があり高く, 回避得点が低い。したがって拮抗指数も低い。また項目別にみても「あたたかい」「あかるい」「たのしい」「うつくしい」の4項目の平均得点があり高く高かったことは, 新道⁷⁾らが述べる女性が子どもに対して持つ特定の感情という母性意識の規定そのものを示していることが考えられ, 本学学生は「子ども好き」で母性意識の高いことが推察された。さらに子どもを回避しようとする感情が少なく, 子どもを明るい面と暗い面の両方にわたって好ましいと思う感情に富んでいるともいえる。

また児童期から青年期のいかなる時期においても乳児と多く接触した者は, 乳児に対する接近感情が高いという研究結果⁶⁾や, 幼児の世話をしたりあやしたりした経験のある者ほど, 好意的感情の評定値が高いという報告¹²⁾がある。これは乳幼児との接触経験そのものが何らかの形で好意的な感情を喚起すると考えることができ, 本学学生の接近得点が高いことはこのこととも合致する。

母性看護学実習では出生直後の母子と直接触れ合う体験をもつことができ, 学生自身が母性を実感する刺激となる。また花沢は「母性理念の変容は結婚という経験より出産や育児の経験によって生ずるという傾向をみるのができた¹³⁾」と述べている。さ

らに Rubin, R.¹⁴⁾や Mercer, R.T.¹⁵⁾は母性性の発達は学習により後天的に育てられるものであるという立場をとっており, これらをあわせて検討すると今後の母性看護学実習で実際に新生児と接触しケアを繰り返すことで, 児を受け入れる感情がより確かな認識へと変容し, 育児に対する態度や価値が肯定的になると考えることができる。

しかし, 本学学生の母性意識は高く「子ども好き」で, 子どもを好ましいと思う感情に富んでいるという反面, 育児に対しては積極的ではないと思われる傾向を持っていると考えられる。大日向¹⁶⁻¹⁸⁾は, 母性・父性という価値概念にかえて「育児性」という新たな概念を提起している。そこでは従来の性別役割分担や親役割にとらわれることなく, ひとりひとりの育児能力の個別性を見出し, その弱点を支援していくことが必要であることを指摘している。このことは本学学生の特異性を考慮する際, 個別に適切な実習指導方法などを検討することが課題となろう。

おわりに

今回, 学生の背景や母性理念および対児感情を他の看護学科学生や20歳代未婚女性と比較検討することにより, 本学学生における母性看護学実習前の母性意識の特徴を分析した。

母性看護学実習は満足体験と喪失体験の両方を体験するという研究結果¹⁹⁾もあり, 実習体験によっては否定的な母性意識の高まる可能性も考えられる。したがって今後は実習指導方法を検討していくとともに, 母性意識に与える影響要因の一つとして母性看護学実習による変化や実習体験との関係なども検討していきたい。

文献

- 1) 竹ノ上ケイ子, 内海滉 (1992) 看護学生の母性性の発達に関する研究 (2). 日本看護研究学会誌, 15 (3) : 9-18.
- 2) 花沢成一 (1992) “母性心理学”, 医学書院, 東京, P. 240-241.
- 3) 花沢成一 (2), P. 13.
- 4) 花沢成一 (2), P. 64-65.
- 5) 伊藤道子 (1997) 母性看護実習が看護学生の母性意識の発達に与える影響. 母性衛生, 38 (1) : 25-33.
- 6) 花沢成一 (2), P. 79-85.
- 7) 新道幸恵, 和田サヨ子 (1992) “母性の心理社会的側面と看護ケア”, 医学書院, 東京, P. 98-101.
- 8) 平井信義 (1981) “母性愛の研究”, 同文書院, 東京, P. 56-165.
- 9) 新道幸恵 (7), P. 98.
- 10) 斎藤益子, 塚田トキエ, 高山巖 (1994) 母性意識に関する研究 (第2報) 「未婚女性の母性意識」とその形成に影響する因子-母親, 弟妹, 幼児との関わりから-. 母性衛生, 35 (2) : 38-43.
- 11) 厚生省 (1998) “平成10年版厚生白書” ぎょうせい, 東京, P. 13-49.
- 12) 青木まり (1987) 女性青年における女性性発達の様相 (2). 日本教育心理学会第29回総会発表論文集 : 244-245.
- 13) 花沢成一 (2), P. 38-43.
- 14) Rubin, R. (1984) “Maternal identity and the maternal experience”, Springer Publishing Co, New York. [新道幸恵, 後藤桂子 (1997) “母性論”, 医学書院, 東京, P. 1-13.]
- 15) Mercer, R.T. (1985), The process of maternal role attainment over the first year. Nursing Research, 34 : 198-204.
- 16) 大日向雅美 (1988) “母性の研究”, 川島書店, 東京, P. 245-253.
- 17) 大日向雅美 (1990) 日本社会の変遷と母性. こころの科学30 : 85-91.
- 18) 大日向雅美 (1996) 母性から育児性へ. 現代のエスプリ342 : 116-122.
- 19) 久川洋子, 和田サヨ子 (1995) 母性看護実習の“ふりかえり” 面接による学生の喪失体験の分析. 第26回日本看護学会集録 (看護教育) : 88-90.

受付日 2000年3月16日